

5 金属製品・石製品・土製品 (PL.68)

今回報告する地域から出土した奈良時代の金属製品・石製品・土製品は少なく、しかもその多くは床土下の遺物包含層からの出土である。以下種類ごとに述べる。

鉄鋤先 (1) U字形の鉄板2枚をあわせ、叩いて整形したものである。先端部を折損しており歯先の状態は不明であるが、外縁部は使用のため磨滅している。袋部は先端で推定の深さが約2.2cmあり、一部に木質をとどめる。全長16.8cm、全幅16.8cm。SB6166出土。この種の鉄鋤先の類例としては、静岡県伊場遺跡から出土した木製の身部を伴った例が有名である。本例も木製身部の先端に装着したもので、推定第1次朝堂院地域のSD3765からは柄と身を一木でつくる完形品が出土している。ただし伊場遺跡出土品は歯先がほぼ直線となるもので、形態的には奈良県阿部六ノ坪遺跡や鳥取県伯耆国庁跡SK04の出土品が本例に最も類似する。特に阿部六ノ坪遺跡では井戸内から木簡・削掛けなどと共に出土し、出土状態の類似が注目される *

鉄釘 (2・3・4) いずれも鍛造の角釘である。頭部のつくりによってA～Dまでの4種に分類される。このうちの端部を折り曲げて頭部とするA (2・4) と、平形の丸頭をつくるD (3) がみられる。2は頭部と先端部を折損する。断面は一辺1.2cmの方形となる。全長 (17.1cm)。6ADD-Q区出土。3は楕円形の釘頭をつくる。断面は一辺0.8cmの略方形となる。全長15.1cm。6ADC-G区出土。4は先端を折損する。全長6.1cm。6ADD-Q区出土。 *

鉄鋳 (8) 断面長方形の鉄棒の先端を偏平に細くし楔状とする。頭部は丸くなる。頭部の敲打痕と先端部の磨滅ははっきりしない。全長8.1cm、断面幅1.0cm、厚さ0.8cm。6ADD-Q区出土。

鉄鏃 (4・7) 4は平根式の鉄鏃である。先端部を折損するが良く原形をとどめている。鏃身は斧箭式となる。茎は0.4cm角で細長く、先端をとがらせる。全長 (15.1cm)、身最大幅3.1cm。6ADC-H区出土。7は両端を折損する。厚さが0.2cmしかない偏平なものであるが、鉄鏃の茎と考えここに含めた。全長 (7.4cm)、最大幅0.9cm。6ADC-H区出土。 *

鋳銅製品 (10) 青銅製。左右に大きなバリが残り、上部にも溶銅がはみだしている。香炉の脚部か。左右のバ리를欠失する他には二次的な破損はなく、本体の鋳込みに至る前に鋳造に失敗し、廃棄されたものと思われる。高さ4.7cm、下端幅2.6cm。6ADC-G区出土。 *

砥石 (5・6) 5は両端を折損する。表裏に剝離が見られる。表面は平滑でよく研磨されている。全長 (9.9cm)、幅3.1cm、最大厚1.0cm。砂岩片岩。6ADD-P区出土。6は方柱状の砥石。表裏二面を研面としている。下端を折損する。全長 (12cm)、幅3.1cm、最大厚3.8cm。砂岩片岩。6ADD-P区出土。 *

韃羽口・鋳滓 発掘区西端の長方形土塋SX6350と掘立柱建物SB6360内のピット群からは、韃羽口や鋳滓が多量に出土している。韃羽口は小片に破碎したものが多く、図化できるものはない。鋳滓は分析の結果鉄滓が大部分を占め、一部に銅滓が混っている。

1) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編Ⅰ』1978
p.13～14。

2) 『平城宮報告Ⅺ』p.201～202。

3) 関川尚功「桜井市阿部六ノ坪遺跡発掘調査
概報」(『奈良県遺跡調査概報 1982年度 第1

分冊』1983) p.233。

4) 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報
(第3次)』1976 p.14～15。

5) 『平城宮報告Ⅸ』p.78。